

古今和歌
上


~~~~~

~~~~~の~~~~~を~~~~~  
~~~~~の~~~~~

~~~~~の~~~~~

~~~~~の~~~~~

~~~~~の~~~~~

~~~~~の~~~~~

~~~~~の~~~~~

~~~~~の~~~~~

~~~~~の~~~~~

~~~~~の~~~~~

~~~~~の~~~~~

~~~~~の~~~~~

~~~~~の~~~~~

~~~~~の~~~~~

~~~~~の~~~~~

~~~~~の~~~~~

~~~~~の~~~~~

~~~~~の~~~~~

~~~~~の~~~~~

~~~~~の~~~~~



















古今和歌集卷之第一

春舟上

春舟上りては春の日の光を

在厚元方

年此内は春の日の光を

春舟上りては春の日の光を

紀貫之

春舟上りては春の日の光を

春舟上りては春の日の光を

春舟上りては春の日の光を

二條は春の光景

春の光景を詠む

春の光景を詠む

春の光景を詠む

春の光景を詠む

春の光景を詠む

春の光景を詠む

春の光景を詠む

春の光景を詠む

春の光景を詠む

二條は春の光景

春の光景を詠む

春の光景を詠む

春の光景を詠む

春の光景を詠む

春の光景を詠む

春の光景を詠む

春の光景を詠む

春の光景を詠む

春の光景を詠む

明治の年

1878

春の光景を記す  
寛平は母を慕ふ心

源氏物語

昔の光景を記す

紀元

花の光景を記す

大正

昔の光景を記す

在源棟梁 兼平

しるしを記す

題

一

花の光景を記す

昔の光景を記す

花の光景を記す

花の光景を記す

花の光景を記す

花の光景を記す

花の光景を記す

花の光景を記す

秋の七つ草のあはれを詠ふ

秋の七草

あはれ

あはれを詠ふ

あはれ

あはれ

あはれを詠ふ

あはれ

あはれ

あはれを詠ふ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれを詠ふ

あはれを詠ふ

あはれ

あはれ

あはれを詠ふ

あはれ

あはれ

あはれを詠ふ

あはれを詠ふ

あはれ

あはれ

あはれ

春の光をうらやまふ *Spring Light*

梅の香 *Plum Blossom*

梅の花をうらやまふ *Plum Blossom*

梅の香 *Plum Blossom*

梅の花をうらやまふ *Plum Blossom*

梅の花をうらやまふ *Plum Blossom*

梅の花をうらやまふ *Plum Blossom*

梅の花をうらやまふ *Plum Blossom*

梅の花をうらやまふ *Plum Blossom*

梅の花をうらやまふ *Plum Blossom*

梅の花をうらやまふ *Plum Blossom*

梅の香 *Plum Blossom*

梅の花をうらやまふ *Plum Blossom*

梅の香 *Plum Blossom*

梅の香 *Plum Blossom*

梅の花をうらやまふ *Plum Blossom*

梅の香 *Plum Blossom*

梅の香 *Plum Blossom*

梅の花をうらやまふ *Plum Blossom*

梅の香 *Plum Blossom*







題一 頃

よん人志

いふはふもあはれ梅花をよみてよん人志  
よん人志

よん人志

見てもいふはれ梅花をよみてよん人志  
花をよみてよん人志

見わすれ柳梅をよみてよん人志  
梅花をよみてよん人志

よん人志

よん人志

よん人志

よん人志

よん人志

よん人志

よん人志

よん人志

寛平法時貴之

よん人志

よん人志

よん人志

伊勢

梅の花よけのついでに  
うしろのうしろのうしろ  
うしろのうしろのうしろ

うしろのうしろ

うしろのうしろのうしろ  
うしろのうしろのうしろ

うしろのうしろ

うしろのうしろのうしろ  
うしろのうしろのうしろ

うしろのうしろ

うしろのうしろのうしろ  
うしろのうしろのうしろ

うしろのうしろのうしろ  
うしろのうしろのうしろ

うしろのうしろ

うしろのうしろのうしろ  
うしろのうしろのうしろ

うしろのうしろ

うしろのうしろ

うしろのうしろ

うしろのうしろのうしろ  
うしろのうしろのうしろ

うしろのうしろ

うしろのうしろ

うしろのうしろのうしろ  
うしろのうしろのうしろ

古今傳歌集卷之第二

春哥下

題 一 次

一 見 一 一

善哉此花のくはれ梅もくはれんをいさか  
 日よしのあらしと海をわきのあめ梅のあめ  
 残のいらぬもあそび梅花あそび世中をいけ  
 小気なふゆのあそび梅をれらぬふゆ梅  
 小気なふゆのあそび梅をれらぬふゆ梅  
 信の通ぬもくはれんをいさか  
 くれんをいさか

梅をれらぬふゆのあそび梅をれらぬふゆ梅

雲林院のくはれ花のいらぬふゆ梅

くはれんを

くはれんをいさか 西陽

くはれんをいさか 西陽

梅乃をれらぬふゆのあそび梅をれらぬふゆ梅

くはれんをいさか

花をれらぬふゆのあそび梅をれらぬふゆ梅  
 くはれん院のくはれ花のいらぬふゆ梅

くはれんをいさか

梅をれらぬふゆのあそび梅をれらぬふゆ梅

あひまきりし人のかほをみれば  
のらひにみれば花あはれし

はるかな

あはれにまきりし人のかほをみれば  
のらひにみれば花あはれし

春霞あはれにみれば花あはれし

あはれにみれば花あはれし

あはれにみれば花あはれし

あはれにみれば花あはれし

あはれにみれば花あはれし

あはれにみれば花あはれし

東文雅院あはれにみれば花あはれし

流るる水とみれば花あはれし

可なりし世

あはれにみれば花あはれし

あはれにみれば花あはれし

はるかな

あはれにみれば花あはれし

あはれにみれば花あはれし

あはれにみれば花あはれし

橋花の教はあり 紀さきののり

久遠の光のしげきまは果志のゆきく形はらうん

春まは橋のらんめてさうな花のらねを

らねらう 夏原のうしせ

春風の形はありとまきそひらうしやう海をらん

らうしは教はあり 凡は因らうし

春まはらうしと橋をいふらねらうのうし

初えよのかりく海をまうてうえらう

けしゆらう

春まはらうしと橋花のうしとらねらうのうし

題 大付らうらう

春まはは海の橋をれらうと橋はありとあは

まう子院奇合家 つくはま

橋花らうらう風のまはあまの形をうしに海をまう

うしはらうしと海を

平城天皇大同天子

古里と成りけしとあま色はうしと花のうし

春まはらうとあう 春まはらうしと

花の色はあまらうとあま色はうしとあま色はうし

寛平は時貴のうしとあま色はうし

春まはは師

花のもも今かりしも喜そかりし色も今かり  
題一十 今人志くは

まはりのいろもあまのしほきつらうら花はも  
喜乃あそそあははくゆい

んといとまうまう春あ人ふまはれあ花も  
うらん院のんまはれに花ん又山乃  
かりにうあうけら村又あ

いふまはれ山道あしつらもなれあをけ花の陰  
春乃あそそあははくゆい

月七舟ふあはれ花一ははあそそあ  
まのしほきつらうら花はもあうら

まはれ花の感ありあんとあひん事あ命や  
花のまもれあはくゆいあはくゆい  
あはくゆいあはくゆいあはくゆい  
あはくゆいあはくゆいあはくゆい

寛平沙時あそそあははくゆい

あはくゆい

あはくゆいあはくゆいあはくゆい  
あはくゆいあはくゆいあはくゆい  
あはくゆいあはくゆいあはくゆい  
あはくゆいあはくゆいあはくゆい



在原元方

花のうきよき花のうきよき  
うららかに花のうきよき

かたし

花のうきよき花のうきよき  
花のうきよき花のうきよき

かたし

かたし

花のうきよき花のうきよき  
花のうきよき花のうきよき

曲待治子新

花のうきよき花のうきよき  
花のうきよき花のうきよき

仁和寺申おのり  
とてきりきり

とてきりきり

在原後蔭

花のうきよき花のうきよき  
花のうきよき花のうきよき

かたし

花のうきよき花のうきよき  
花のうきよき花のうきよき

かたし

かたし

花のうきよき花のうきよき  
花のうきよき花のうきよき

かたし

かたし



家もあはれ花さけのさかひのさかひ  
かきとつとつとつ

我宿もさけのさかひをゆりすまへそめ  
題一 守 かん人 志くは

今更時晴白方人橋の小橋さか  
まむに白あ色まむぬくかうあつ  
山吹さけぬぬさ花さけと極も人  
さの川さけぬぬさ花さけと極も  
後好 後好

吾非河岸山吹さけぬぬさ花さけ  
とつとつとつとつとつとつとつ  
とつとつとつとつとつとつとつ  
とつとつとつとつとつとつとつ

花さけぬぬさ花さけぬぬさ花さけ  
とつとつとつとつとつとつとつ  
とつとつとつとつとつとつとつ  
とつとつとつとつとつとつとつ

春はさかひのさかひのさかひ  
とつとつとつとつとつとつとつ  
とつとつとつとつとつとつとつ  
とつとつとつとつとつとつとつ

とつとつとつとつとつとつとつ  
とつとつとつとつとつとつとつ  
とつとつとつとつとつとつとつ  
とつとつとつとつとつとつとつ

とつとつとつとつとつとつとつ  
とつとつとつとつとつとつとつ  
とつとつとつとつとつとつとつ  
とつとつとつとつとつとつとつ

原しゆきりしき久し〜  
うらやまあり けしきあり

ついでに花のうらやまをいふに  
あつたてのうらやまをいふに  
あつたてのうらやまをいふに

あつたて

花らわらぬ水はあつたてのうらやまをいふに  
春と惜し〜あり せしきあり

横光のうらやまをいふに  
寛平はしつてあつたてのうらやまをいふに

あつたて

花のうらやまをいふに  
あつたてのうらやまをいふに  
あつたてのうらやまをいふに

あつたて

あつたてのうらやまをいふに  
あつたてのうらやまをいふに  
あつたてのうらやまをいふに

寛平はしつて

あつたてのうらやまをいふに



伊勢

と申すはあまのつとめをいふにけりしに  
後人といふ

と申すはあまのつとめをいふにけりしに  
後人といふ

と申すはあまのつとめをいふにけりしに  
後人といふ

と申すはあまのつとめをいふにけりしに  
後人といふ

と申すはあまのつとめをいふにけりしに  
後人といふ

と申すはあまのつとめをいふにけりしに  
後人といふ

と申すはあまのつとめをいふにけりしに  
後人といふ

と申すはあまのつとめをいふにけりしに  
後人といふ

伊勢

と申すはあまのつとめをいふにけりしに  
後人といふ

と申すはあまのつとめをいふにけりしに  
後人といふ

と申すはあまのつとめをいふにけりしに  
後人といふ

と申すはあまのつとめをいふにけりしに  
後人といふ

と申すはあまのつとめをいふにけりしに  
後人といふ

と申すはあまのつとめをいふにけりしに  
後人といふ

と申すはあまのつとめをいふにけりしに  
後人といふ

と申すはあまのつとめをいふにけりしに  
後人といふ

と申すはあまのつとめをいふにけりしに  
後人といふ

是れは世のあはれなるものなり  
とて又よとてあはれ世に  
あはれなるものなり

寛平沙時清盛の事

寛平沙時清盛の事

寛平沙時清盛の事

五月のあはれなるものなり  
あはれなるものなり

寛平沙時清盛の事

六月のあはれなるものなり  
あはれなるものなり

寛平沙時清盛の事

七月のあはれなるものなり  
あはれなるものなり

寛平沙時清盛の事

八月のあはれなるものなり  
あはれなるものなり

寛平沙時清盛の事

九月のあはれなるものなり  
あはれなるものなり

寛平沙時清盛の事

十月のあはれなるものなり  
あはれなるものなり

寛平沙時清盛の事

十一月のあはれなるものなり  
あはれなるものなり

さしつかへなくお返しを  
お返しを御座います

お返し

お返しを御座います  
山崎徳兵衛様へ

お返し

郵金人宛にお返しを  
お返しを御座います  
お返しを御座います  
お返しを御座います

お返しを御座います

お返しを御座います

お返し

お返しを御座います  
お返しを御座います

お返しを御座います  
お返しを御座います

お返し

お返しを御座います  
お返しを御座います  
お返しを御座います  
お返しを御座います



とて

らんとて世をわらふ事ありけりやと我の常を此花  
とれ月のほろりて日一あり

暮の秋とてふを道流の如く深き風吹ん

古今和歌集巻の第四

秋歌上

梅並目にそめり 藤原敏行撰

梅とあまめあさやめえお風のもめあおるる歌  
秋立白くたよのこもあまのうららに  
せうえししきうとのおふはひうてしあり

けしき

海風のほろりてそめりやと我の常を此花

新 母 かん

あまのこを梅とてふを道流の如く深き風



いづれ日あり 月夜を思ふ

ふりかへし年此時を思ふは秋の夜なる心

そよひのそよ 懐人なほ

あはれを思ふは月夜秋の心は秋の心なり

大方の秋なる心は秋社遊しは秋の心なり

我ふは秋なりしわらふは秋の心なり

物毎の秋を思ふは秋の心なり

独りの床の秋を思ふは秋の心なり

これこそ秋の心なり

いづれ日あり 月夜を思ふ

いづれ日あり 月夜を思ふ

いづれ日あり 月夜を思ふ

いづれ日あり

いづれ日あり 月夜を思ふ

いづれ日あり 月夜を思ふ

いづれ日あり 月夜を思ふ

いづれ日あり 月夜を思ふ

いづれ日あり 月夜を思ふ

いづれ日あり

いづれ日あり 月夜を思ふ



くわたりをいり 在る元方

待介河を押し初めけしき戸のあり

是貞れんこの家のあなれい

ともの

秋風小初りかきこもわつそくなまきとあはし

も 後人といふ

くわたりをいり初めけしき戸のあり

いしりもわつたる白雲流るるありあはし

まきあつたえしり初めけしき戸のあり

あはしをいり初めけしき戸のあり

くわたりをいり初めけしき戸のあり

寛平法師あつたえしり初めけしき戸のあり

あはしをいり初めけしき戸のあり

秋風あつたえしり初めけしき戸のあり

あはしをいり初めけしき戸のあり

あはしをいり初めけしき戸のあり

くわたりをいり初めけしき戸のあり

是貞のいり初めけしき戸のあり

あはしをいり初めけしき戸のあり

くわたりをいり初めけしき戸のあり

後人云々

奥山紅葉をみたりて  
秋の光に出し  
そよそよ

秋萩のうらみれとれ  
萩の光に出し  
萩の光に出し

是貞れんとの花は奇なり

後原教行物語

秋萩のうらみれとれ  
萩の光に出し  
萩の光に出し  
萩の光に出し

とれとれ

とれとれ

秋萩のうらみれとれ  
萩の光に出し  
萩の光に出し

秋萩のうらみれとれ  
萩の光に出し  
萩の光に出し

とれとれ

秋萩のうらみれとれ  
萩の光に出し  
萩の光に出し

文臣の御書

林林宗通の御書

宗通の御書

若林宗通の御書

宗通の御書

宗通の御書

宗通の御書

若林宗通の御書

宗通の御書

宗通の御書

林林宗通の御書

宗通の御書

若林宗通の御書

宗通の御書

宗通の御書

若林宗通の御書

宗通の御書

若林宗通の御書

宗通の御書

若林宗通の御書





平貞文

平貞文

今より極して遠く礼儀ありあつた秋は俺よりま  
寛平は時をたのむに等し

あつた

秋の神々を祀り礼儀ありあつた

素直法師

我の心を養ふ思ふ人養ふ人

題 換人

見たりぬらひの事をも信じて秋を多くと秋をま

女弟の秋の思ふに秋の思ふに

月事なるとんあふあふあふと

仁和らんとみんあつた

の海は遠くをんそなたり

過船とつた家もつた

存心秋のふつとつた

に後くはまつた 傍山過船

里あれて人よりあつた

古今和歌集卷之五

秋歌下

是日此日この日は秋の日の

文句

吹叶に秋葉も吹散れし心風と知りし人  
草もももまらぬもやの海波の礼も秋ありき

梅の歌今もまらぬもやの

文句

秋の日の日は秋の日の

文句

身立てもうもあつたは秋の原のりからとあは

秋の日の日は秋の日の

子年梅の日は秋の日の

貞観の法寺後傍の梅の

あはれもよもやからまらぬ梅の

まらぬもよもやからまらぬ梅の

はのそよもやからまらぬ梅の

あはれもよもやからまらぬ梅の

あはれもよもやからまらぬ梅の

あはれもよもやからまらぬ梅の

秋風の物ほ日一り言ね山冬は梅を多計り  
口も貝乃らんは家の音合にあり  
とゆくの物言

白雲をたひらき道へ梅枝のさかんに  
まを志考

梅枝の露とてあま垂れしかりて  
題 一 寸 一 かん 一 一

秋の露多し梅にけし枝出の葉は  
たねのさかぬるあり  
つらき

白雲をたひらき道へ梅枝のさかんに  
梅枝の露とてあま垂れしかりて  
あま垂れし梅枝のさかんに  
秋の物ほ日一り言ね山冬は梅を多計り  
口も貝乃らんは家の音合にあり

貫之

白雲をたひらき道へ梅枝のさかんに  
口も貝乃らんは家の音合にあり

貫之

雨もねかたりし梅枝のさかんに

寛平はし村貴とて此等の名号のし

かんくし

しつねいふを備きし御業は今の御代もさうれ  
大和の御ありし御りさう村に御宗より  
こそしつねいふを備きし御業あり

紀とりのり

たふれ御されし村貴は御のしとさう御り  
是御りたふれし御代御り  
御業ありし御り

御業ありし御り

秋風とてあり 海上は別

御代ありし御り  
人のせんたふれし御り

御代あり 在原業平御代

撫じの秋ありし御り

寛平はし村貴とて此等の名号のし

かんくし

是御代の上ありし御り  
御代ありし御り  
御代ありし御り

是貞公の家の名をうゝ

こゝのさゝのり

露ありて折れぬらん菊の花もあはれおれぬらん  
寛平沙村菊のよれ菊のよれ

入道千重

梅の花の香をいふも菊の香をいふも秋の香をいふも  
同じ花の香をいふも菊の香をいふも  
ゆりていふも菊の香をいふも菊の香をいふも  
さゆりあはれ上の漬るらん菊の香をいふも  
とさあり

菊の香をいふも

梅の花の香をいふも菊の香をいふも

仙美小菊をいふも菊の香をいふも

とさあり 素直法師

如好の香をいふも菊の香をいふも

菊の香をいふも菊の香をいふも

とさあり

花の香をいふも菊の香をいふも

とさあり

ひまの香をいふも菊の香をいふも

世中れん菊の香をいふも菊の香をいふも

花とてしあり けしひさ

花の葉白く花はほほえみ 軒下りてふれとてわが身を

白菊の花とあり 凡河内新地

わがふれいわたん初おれ 重なりとせり由業おれ

是奥のらんを家乃并空のし

らんし

色うら花の葉とてしやふらゆひ白く花は枯れ

仁和寺に菊のしれやきつすけよとてく

自れとけしれなれとてしやうきり

平白文

秋とてく竹枝とて花葉は空うけふしに花は

人の家かりきり葉のしれとてし

ゆりきりふあり けしひさ

送初句しれ葉のしれとてあはれは

題しらん 後人未知

花の葉とて花葉は空うけふしに花は

あはれとてしれとてあはれとて

あはれとてしれとてあはれとて

奥山れいとうしおはれとてしれとて

題しらん 後人未知

新田公家礼あり先づ海へ船中より申分ん  
冊子ありて其の法を言ふ事也

龍田河を築く事あり神ありて其の山由所あり  
又龍をくわひ築く事あり此等も凡人也

事いふ事と申す事ありて其の法を言ふ事也  
海へ舟をくわひ築く事あり此等も凡人也  
舟の事ありて其の法を言ふ事也  
舟の事ありて其の法を言ふ事也  
舟の事ありて其の法を言ふ事也  
舟の事ありて其の法を言ふ事也  
舟の事ありて其の法を言ふ事也  
舟の事ありて其の法を言ふ事也  
舟の事ありて其の法を言ふ事也  
舟の事ありて其の法を言ふ事也  
舟の事ありて其の法を言ふ事也

舟の事

舟の事ありて其の法を言ふ事也  
舟の事ありて其の法を言ふ事也  
舟の事ありて其の法を言ふ事也  
舟の事ありて其の法を言ふ事也

舟の事

舟の事ありて其の法を言ふ事也  
舟の事ありて其の法を言ふ事也  
舟の事ありて其の法を言ふ事也  
舟の事ありて其の法を言ふ事也  
舟の事ありて其の法を言ふ事也  
舟の事ありて其の法を言ふ事也  
舟の事ありて其の法を言ふ事也  
舟の事ありて其の法を言ふ事也  
舟の事ありて其の法を言ふ事也  
舟の事ありて其の法を言ふ事也

舟の事

舟の事ありて其の法を言ふ事也  
舟の事ありて其の法を言ふ事也  
舟の事ありて其の法を言ふ事也  
舟の事ありて其の法を言ふ事也

業平物語

白平権神成りてまゝ立回りの御事ありておぼしは

美貞の心は家来の哥をたぐひ

とて好むの物語

我ら愛せしも志しれりふもたれぬれ故に

いふこと

神の心家の山は秋のしほをしらるる心は

山よおまゝおんてらう好むまじり

らかみり 貴人

かろくもして敬つる奥のしほをたぐひて

秋は

の心

立回りのしほの神の心は秋のしほをたぐひて

なれはしほのしほをたぐひて

いふ

しほ

故に立回りの神の心は秋のしほをたぐひて

神の心は秋のしほをたぐひて

立回りのしほをたぐひて

いふこと

神の心は秋のしほをたぐひて

寛平はしほをたぐひて



後原乃おの風

白雲は花ののちうららかにあはれをせしむる  
あはれはうららかにあはれをせしむる

白雲は花ののち

あはれはうららかにあはれをせしむる  
あはれはうららかにあはれをせしむる

あはれはうららかに

あはれはうららかにあはれをせしむる  
あはれはうららかにあはれをせしむる

あはれはうららかに

あはれはうららかにあはれをせしむる  
あはれはうららかにあはれをせしむる  
あはれはうららかにあはれをせしむる  
あはれはうららかにあはれをせしむる  
あはれはうららかにあはれをせしむる  
あはれはうららかにあはれをせしむる  
あはれはうららかにあはれをせしむる  
あはれはうららかにあはれをせしむる  
あはれはうららかにあはれをせしむる  
あはれはうららかにあはれをせしむる

あはれはうららかに

あはれはうららかにあはれをせしむる  
あはれはうららかにあはれをせしむる

あはれはうららかに

あはれはうららかに

あはれはうららかにあはれをせしむる  
あはれはうららかにあはれをせしむる



古今和歌集卷之第六

冬哥

題 一寸

後人不知

沈田海より神倉月時をいふとておぼし

冬はあつてをわらう

源宗平物語

冬はあつてをわらうとておぼし

冬一寸

後人一寸

冬はあつてをわらうとておぼし

冬はあつてをわらうとておぼし

今より流はたかも我道はたかも

後より流はたかも我道はたかも

今より流はたかも我道はたかも

今より流はたかも我道はたかも

今より流はたかも我道はたかも

今より流はたかも我道はたかも

今より流はたかも我道はたかも

今より流はたかも我道はたかも

今より流はたかも我道はたかも

今より流はたかも我道はたかも



新しきまの月かたのまふち舟のまにまの白雲  
野——寸 傍人かへん

くぬうよふも路のまきまあつらねん書梅の社  
梅もまねん見かん久しうあつらねん書梅の社

此舟のまの人のいひのまのまの  
こいこい

梅の花に書梅もまのまの  
あつらねん書梅

花のまの書梅もまのまの  
書梅のまの梅の花もまの

まのまの  
梅のまの書梅もまのまの

書梅のまの書梅もまのまの  
まのまの

書梅のまの書梅もまのまの  
物まのまの書梅もまのまの

あつらねん  
あつらねん

あつらねん  
あつらねん

在厚元方





まくれ家小先咲梅花言う中を此道とるから

素性法師

古来のよきわらひをこのまに中を此道とるから  
外に思ひあはせしむる方々の神を知らん我君をたす

若原の三善のち干様ふらえん

在る原とけしん

けつあもらそを此道とるから中を此道とるから

此方いよ人 在る原のまに中を此道とるから

らーからこのはのちのちを此道とるから

かりてしむるまらうせし法

百代よまのちまるといふ中を此道とるから

内約のまに石大おまのちのちを此道とるから

頃ーける村小のまにまらうけるしむるま

屏風にまらうけるしむるま

ま日影に着れ橋つ百代といふまに神とる

山をまのまにまらうけるしむるま

夏

けしき声あつたに時鳥まらうけるしむるま

秋

信れはのまにまらうけるしむるま



中書院の御書に書きたる御書に  
御書に書きたる御書に  
御書に書きたる御書に

御書に書きたる御書に

御書に書きたる御書に

御書に書きたる御書に

御書に書きたる御書に

古今和歌集卷第八

離別歌

題一付

在原行平和歌

立別りてはるの露ふあつた松の  
よかん人よかん

よつらあつた松は秋原の松とて  
湯のきりし井のほとり別れを人よかん  
よのつらあつた松は秋原の松とて  
湯のきりし井のほとり別れを人よかん

よのつらあつた松は秋原の松とて  
湯のきりし井のほとり別れを人よかん

Handwritten cursive text, likely a signature or name, possibly reading "Kawakami" or similar.

Handwritten characters, possibly "Kawakami".

Handwritten cursive text, possibly a signature or name, possibly reading "Kawakami".

Handwritten cursive text, possibly a signature or name, possibly reading "Kawakami".

Handwritten characters, possibly "Kawakami".

Handwritten cursive text, possibly a signature or name, possibly reading "Kawakami".

Handwritten cursive text, possibly a signature or name, possibly reading "Kawakami".

Handwritten characters, possibly "Kawakami".

Handwritten cursive text, possibly a signature or name, possibly reading "Kawakami".

Handwritten characters, possibly "Kawakami".

Handwritten cursive text, possibly a signature or name, possibly reading "Kawakami".

Handwritten characters, possibly "Kawakami".

Handwritten cursive text, possibly a signature or name, possibly reading "Kawakami".

かゝ毎朝目にはしの物露れり  
はあひまき人ほるまは給うて  
あふしんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま

空籠

あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま

あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま

後人

あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま

あふま

あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま  
あふまきんてさしんてあふま

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document. The text is written vertically on the right page of the spread. It appears to be a formal or semi-formal communication, possibly related to a business or administrative matter, given the use of terms like "Handwritten" and "Official".

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document. The text is written vertically on the left page of the spread. It appears to be a formal or semi-formal communication, possibly related to a business or administrative matter, given the use of terms like "Handwritten" and "Official".

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document. The text is written vertically on the far left edge of the left page. It appears to be a formal or semi-formal communication, possibly related to a business or administrative matter, given the use of terms like "Handwritten" and "Official".

平女とのや

秋葉のふきかてかゝる時あふまゝのしほり  
源のよのほくしあふまゝとてたか  
うすふしあふてかゝるまゝとてつら

あらの

命のまじりあふまゝの何うあふまゝか  
出づりし神のまゝとてあふまゝ  
はあふまゝとてあふまゝとてあふまゝ  
はあふまゝとてあふまゝとてあふまゝ  
あふまゝとてあふまゝとてあふまゝ

人あふまゝとてあふまゝとてあふまゝ

今あふまゝとてあふまゝとてあふまゝ  
あふまゝとてあふまゝとてあふまゝ

あふまゝとてあふまゝとてあふまゝ  
あふまゝとてあふまゝとてあふまゝ  
あふまゝとてあふまゝとてあふまゝ  
あふまゝとてあふまゝとてあふまゝ

あふまゝとてあふまゝとてあふまゝ

あふまゝとてあふまゝとてあふまゝ  
あふまゝとてあふまゝとてあふまゝ

あふまゝとてあふまゝとてあふまゝ

人の花ふもたうしくさく夕らるるのり  
かんとうけつおをゆる

傷心通紙

夕暮れをきこひてあんならにさうさく

山ぶのかりてふさふさく人かれ

けつあそに接る 幽仙法師

別と山は梅り梅をせんあんなら花はあ

まき林院のふとて舍利寺いふ山のりて

ゆりまふ梅は花のりてはくさる

僧正庵んせり

山風ふ梅吹きまて乱るん花の梅はあきま

樂山法師

あそひの春もゆたへく白くえんはは花はあ

仁和のふとてあそひはさるあそひ

の流しはあそひありまうてふあ

まらあそひあり 善哉法師

あそひはあそひあそひあそひあそひあそひ

あそひあそひあそひあそひあそひあそひ

あそひあそひあそひあそひあそひあそひ

あそひあそひあそひあそひあそひあそひ

さう月とてりて 貫く

花枝は花とあるわづせをまるといほてあはれ思入

とらかんくうくう

萬葉人王

情じん人の公とてあはれ秋は時ぬく力を傳ゆる

のひらきあはれぬく物くゆく

別字の対ふあり かんく

あはれ枝もまるとわづらわひんんあはれを伝ゆる

まゝの 後人

あはれてあはれ神の由ましくまゝかたきつてを伝

退りくあはれ國あはれあはれ神ははらわん日とあ

のさししとあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれ人ともあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれ山とあはれくし井のあはれあはれ物

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

はらわん

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

道あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれ

古今和歌集卷第九

霧振奇

古今和歌集卷第九

霧振奇

霧のちかき月影のくはるる

安信仲麿

天の原のけしき白のつ三つ山おし月うま

けしきの原のけしき白のつ三つ山おし月うま

けしきの原のけしき白のつ三つ山おし月うま

けしきの原のけしき白のつ三つ山おし月うま

けしきの原のけしき白のつ三つ山おし月うま

けしきの原のけしき白のつ三つ山おし月うま









在原業平物語

あはれに七夕はあふる宿りては川原に我はふゆき  
かよふは身と女とてさうさうとてさうさうとて  
成りしはさふゆきとてさう

あはれ宿り

あはれ宿りあはれ宿りあはれ宿りあはれ宿り

朱雀院のさうさうとてさうさうとて

あはれ宿りあはれ宿り

あはれ宿り

あはれ宿りあはれ宿りあはれ宿りあはれ宿り

あはれ宿り

あはれ宿りあはれ宿りあはれ宿りあはれ宿り

あはれ宿りあはれ宿りあはれ宿りあはれ宿り

あはれ宿りあはれ宿りあはれ宿りあはれ宿り

あはれ宿りあはれ宿りあはれ宿りあはれ宿り

あはれ宿りあはれ宿りあはれ宿りあはれ宿り

あはれ宿りあはれ宿りあはれ宿りあはれ宿り

あはれ宿りあはれ宿りあはれ宿りあはれ宿り

あはれ宿りあはれ宿りあはれ宿りあはれ宿り

あはれ宿りあはれ宿りあはれ宿りあはれ宿り

古今和歌集卷第十

物名

うさぎ

若原敏行和歌

心ゆく花散るにまはるるうさぎの心を

うさぎ

くしやまのまはるるうさぎの心を

うさぎ

在原まはるる

浪花のまはるるうさぎの心を

うさぎ

壬生忠房

被りまはるるうさぎの心を

うさぎ

今まはるる

はるるうさぎの心を

うさぎ

はるる

うさぎの心を

うさぎ

今まはるるうさぎの心を

うさぎ

はるる

うさぎの心を

うさぎ

はるる

うさぎの心を



おれ

後人

おれは世に生かされぬ人なり

おれは世に生かされぬ人なり

おれは世に生かされぬ人なり

おれ

後人

おれは世に生かされぬ人なり

おれ

後人

おれは世に生かされぬ人なり

おれは世に生かされぬ人なり

おれは世に生かされぬ人なり

おれは世に生かされぬ人なり

後人

おれは世に生かされぬ人なり

おれ

後人

おれは世に生かされぬ人なり

おれ

後人

おれは世に生かされぬ人なり

おれ

後人

おれは世に生かされぬ人なり

おれ

後人





おのゝけのしるしは  
かゝる

おのゝけのしるしは  
伊勢

浪波あはれ  
かゝる

うまなまは  
かゝる

おのゝけのしるしは  
かゝる

おのゝけのしるしは

かゝる

おのゝけのしるしは

百利香

おのゝけのしるしは

かゝる

おのゝけのしるしは

かゝる

おのゝけのしるしは

かゝる

おのちの世にわたりておのれをいふことおのれに  
いふことおのれにいふことおのれに  
いふことおのれにいふことおのれに  
いふことおのれにいふことおのれに  
いふことおのれにいふことおのれに

信玄公寶

いふことおのれにいふことおのれに  
いふことおのれにいふことおのれに  
いふことおのれにいふことおのれに  
いふことおのれにいふことおのれに  
いふことおのれにいふことおのれに

いふことおのれにいふことおのれに  
いふことおのれにいふことおのれに  
いふことおのれにいふことおのれに  
いふことおのれにいふことおのれに  
いふことおのれにいふことおのれに

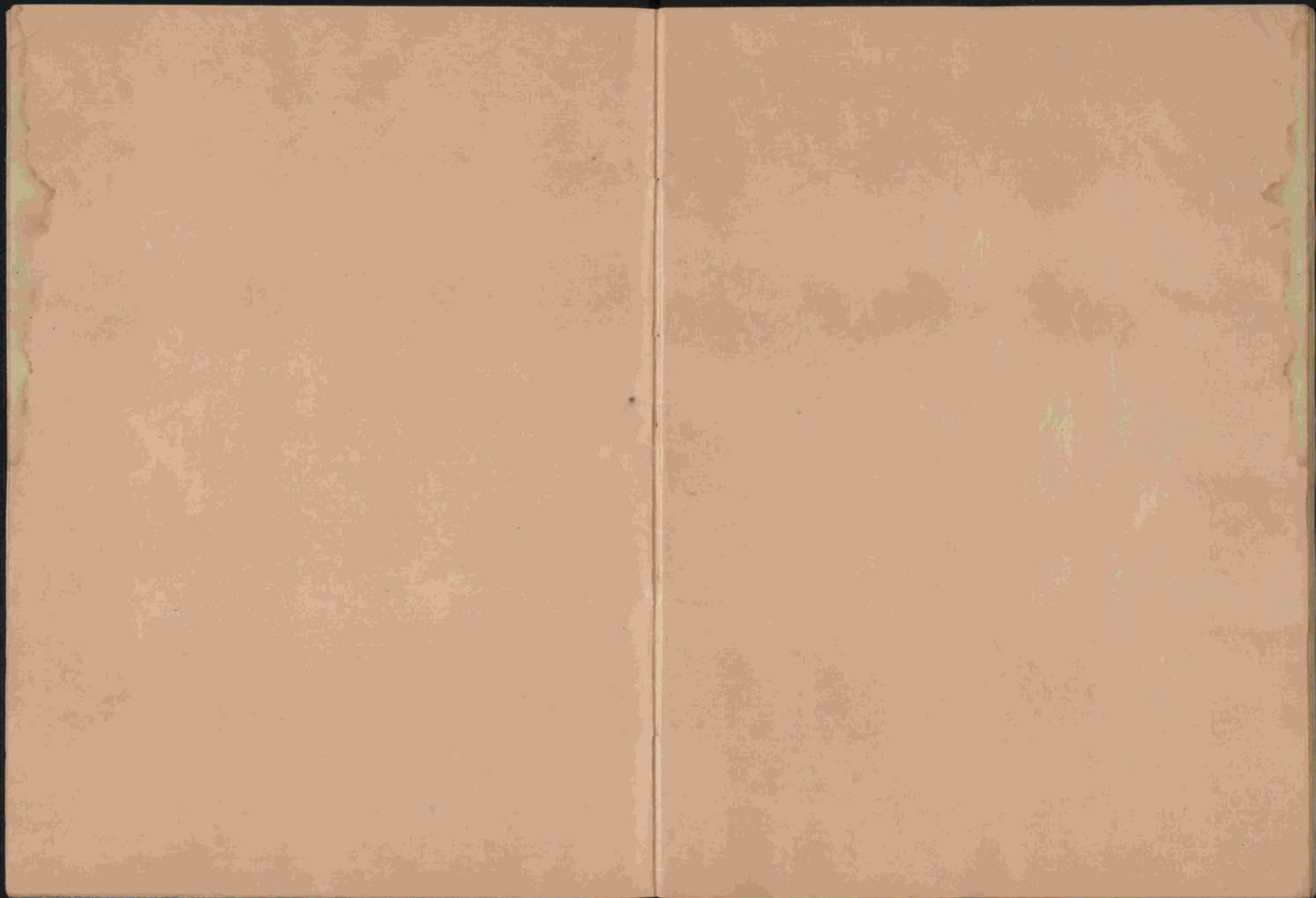
Handwritten text in a cursive script, likely a signature or date, located at the top right of the page.

Handwritten text in a cursive script, located in the upper right quadrant of the page.

Handwritten text in a cursive script, possibly a title or a specific section header, located in the center-right of the page.

Handwritten text in a cursive script, located in the center of the page.

Handwritten text in a cursive script, located in the lower center of the page.









132X  
104  
16